

「ふり返って考える」ことと「教え合う」こと

校長 森 和 久

2月の生活指導の目標は「ふり返って考えよう」です。この「ふり返り」は生活面だけでなく学習においても重要です。自らの学習を計画し、方法を考えて、実行していく力を身につけていくためには、自分の学習をふり返り、必要な修正を行うことが必要だからです。

この「ふり返り」は通常、何かの行動をした後に行うものととらえられがちです。例えば、ある単元の学習をした後、テストを行って、自分ができなかったところを把握するということが事後のふり返りに当たります。この事後のふり返りが必要なことは言うまでもありませんが、「ふり返り」は事後だけではなく、物事を行っている最中の「ふり返り」も重要です。

先日、音楽専攻の学生と話をしていて、「合唱は、自分の発した声と周りの人が発している声を聞いて、絶えず声の調整を行うことが大切」という趣旨の発言がありました。歌っている最中に同時並行で「振り返り」を行い、瞬時に互いに修正することを繰り返すことが、よい合唱につながるというわけです。

同様のことで言えば、合唱の例ほど瞬時ではないにせよ、私も授業をする際には、学生の反応を見聞きし、伝わっていないようなら詳しく話したり、活動の順番を変えたりするなど、「ふり返り」と修正をこまめに行っています。これらは、物事を行っている最中の「ふり返り」と言えるでしょう。

このように物事を行っている際に「ふり返り」を行うことは、物事を行うことそのもの（例えば「歌詞を間違えずに歌うこと」）に意識の大半が費やされるので難しいです。（逆に物事が終わった後の「ふり返り」は、それに意識が集中できるので行いやすい。）しかし、同時並行の「ふり返り」を行うことは、パフォーマンスの質の向上には不可欠です。

目標に照らしてプレゼンを準備しても、プレゼンし

ながら、相手の反応を見て、説明方法を変えたり、時には目標設定そのものを変えたりすることが、力量のあるプレゼンターです。逆に、用意した原稿をひたすら読むだけでは、完璧な原稿であったとしても、効果的ではないでしょう。



このように、物事を行っている際にふり返りを行うことは、一定の力量が必要です。では、どうしてもそういう力を身に付けることができるのでしょうか。十分解明しきれない面も多いのですが、

一般的によいと言われている方法として、「互いに教え合うこと」があります。

人に教えるためには、自分が理解していることを、どのように教えたらよいのか自覚的に考える必要が生じます。自分が何となく理解したこと、特に意識しなくてもできることを、客観的にふり返って言語化する必要があります。そして、説明が伝わっているかどうかをふり返って、説明の仕方の修正に迫られる場面も出てきます。また、人から説明を受けることで、自分が意識していなかった側面に気付かされたり、自分とは異なる説明方法を獲得したりすることができます。

このように「ふり返り」が必要な状況が自然に生じることから、「互いに教え合う」学習が、自分の学習をふり返って、修正する力の育成に効果があると言われるのです。

授業の中で、「教え合う」活動はかなりの頻度で行われていますが、学習内容を理解することのみならず、自らの学習をふり返り、コントロールする力を育てるためにも重要な活動なのです。ご家庭でも、ぜひ「お子様に何かを教えてもらう」機会を意識してもらえるとよいのではないのでしょうか。

